袋入傘（俗ニ參内傘ト云○圖略）

傘ハ白張或ハ朱爪折傘也、朱ヲ貴用トス、袋ハ白晒麻布、紐同平絎、柄總藤卷、上ニ革ノ露ヲ付ル（○中略）

今俗間ニ白麻袋入ヲ參内傘ナド云也、乃チ爪折傘ヲ納ル也、大名モ正月登城ノ時ハ、家格ニ因テ用之、又大禮ニ用之、服モ烏帽子姿也、

〔毛吹草三〕攝津　平野町傘　紀伊　傘紙

以產地爲名

〔萬金產業袋一器財〕傘細工

紀州傘、これ紀州ばかりなる出るにもあらず、今京にてもつはらこしらゆ、手がろきための物すきにて、ほねほそく、柄ほそく、軒の間のいとまでも、至極ほそきをつかひ、高びくにはる事也、さのみ雨に能もなければ、勝手にはよからぬもの也、

〔我衣〕享保ノ比、紀州若山傘下ル、カルク小ブリニシテキレイナリ、常ノサシリヤウニハヨハシ、挾箱入ル用心傘ナリ、

〔續江戸砂子一〕江府名產（并近在近國）

茅場町傘　南かやば町藥師堂の邊にて作之

〔太閤記十六〕呂尊より渡る壺の事

泉州堺津菜屋助右衞門と云し町人、小琉球呂尊へ去年の夏相渡、（文祿甲午）七月廿日歸朝せしが、其比堺之代官は石田杢助にて有し故、奏者として、唐の傘、蠟燭千挺、生たる麝香二疋上奉り、（○下略）

以色爲名

〔守貞漫稿三十傘履〕安政以來、横濱士民往々西洋製ノ鍛鐵八骨及ビ十六骨ノ絹傘ヲ晴雨ニ用ル稀ニ有之、十六骨ハ稀ニテ八骨多シ、他國未用之、後世恐ラクハ、他國ニテモ稀ニ用フル人可有之歟、

〔貞丈雜記八調度〕一柄笠と舊記にあるは、からかさとよむべし、柄の字をからとよむ也、朱柄笠とあ